＊東大附属調査結果概要

高校生の総合学習の探求を支えるものは何か

ー東京大学教育学部附属中等教育学校の“卒業研究”の縦断調査の分析を通してー

報告者　東京大学大学院教育学研究科　高　橋　亜希子

はじめに

平成15年度から高等学校においても「総合的な学習の時間」が正式に導入された。だが，大学受験との両立の負担・教師の負担増などの懸念から，現在も導入率は低く，必ずしも実践は活発といえない状況である。しかし思春期後期は，進路を控え社会への関心が高まる時期であり，この時期に探求学習を行うことが必要という指摘もある（吉田 1993など）。だが，現在高校での総合学習に対する調査研究は非常に少なく（山崎 2003），また生徒がどのように総合学習を受け取り，実施しているかという生徒の視点も不明で，実践に基いた効果の検討が急務である。

東京大学附属中等教育学校の卒業研究は1983年に開始され，高校総合学習の先駆的な実践として高い評価を受けている。そこで卒業研究への縦断的な質問紙調査・面接調査の分析を通じて，① 学習の過程を生徒はどのように捉えているのか ② 学習の過程の中で生じてくる問題は具体的に何であるか ③ 生徒の追及を支える要因に関して，主に生徒の側の視点・体験の側から検討を行う。

研究の方法

対象：東京大学附属中等教育学校で実施されている“卒業研究”実践。高校１年の１月に生徒が個別にテーマを設定し，高校２年４月から高校３年７月にかけて研究を行う。卒業に必要な要件となっている。**調査の方法：**平成10＋X年卒業生の一学年104名に対する縦断的な質問紙調査（テーマ設定前，中間発表時，研究終了後に実施）質問紙調査の実施に当たっては，当時の附属学校の先生方と生徒の全面的なご協力を頂いた。また指導場面の観察・聴き取りも行っている。**項目の内容：**卒業研究への態度，動機，イメージ。研究内容に関する自由記述など

分析：

1　卒業研究における生徒の体験に関して，主に研究過程での生徒の継時的な変化から検討を行う。

2　満足度別の生徒の分析：分析１において満足度の高い生徒・低い生徒の分化が示された。その分化の背景と分化に影響する要因に関して，生徒を満足度別に水準に分け，再分析を行う。

3　事例研究

研究の過程で卒業研究に肯定的な姿勢を示すようになった事例に着目し，より詳細な生徒の分化の背景と支援への具体的な手がかりに関し検討を行う。

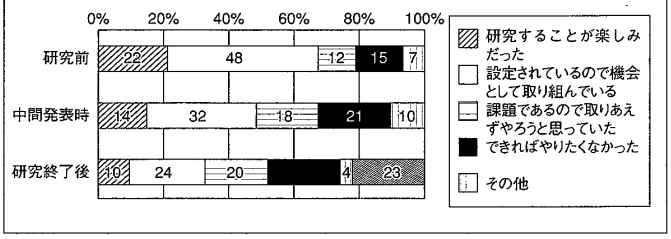
結果

1　卒業研究の中での生徒の体験に関して

A　生徒の意欲の低下とその背景：生徒は卒業研究の開始前は，約７割の生徒が取り組みに前向きな姿勢を示し「大変だけれど価値がある」という肯定的なイメージを持っている。だが，その生徒の意欲は，研究の過程が進むにつれ，下がっていく傾向が見られる。（図１）意欲の低下の背景として「研究の作業の負担」「受験や学校行事との重なり」の二つが見られる。

B　成長体験としての卒業研究：研究終了後，約７割の生徒が「研究を行ってよかったと思う」と回答し，卒業研究に対する生徒の満足度は比較的高い。人との出会いや，自分なりの発見，達成感を得ることができた生徒にとっては卒業研究は充分な成長体験となっている。

図1　「卒業研究に対し、どのような気持ちで取り組んでいますかに対する回答



2　研究途上での生徒の意欲の分化

A　研究途上での生徒の意欲の分化：卒業研究の進行につれて，卒業研究に対する満足感の高い生徒と低い生徒が分かれていく傾向が見られる。そして満足度の低い生徒の卒業研究に対する意欲・イメージが大

きく下がるため，生徒全体の意欲・イメージが低下してしまう。

B　終了時の満足度の違いによる体験・学びの違い
満足度の高い生徒は研究の対象に高い関心を持ち，追究の過程を楽しんでいる。調査を通して得る体験や知識も多く，卒業研究の意義を高く評価している。一方，満足度の低い生徒は，研究への動機も低く，調査を通した喜びや体験も得られず，徒労感のみを感じている。

C　満足度の違いと４つの要因の関連について
「終了時の満足度の違いと受験との両立の負担」「作業の負担」「教員の支援」「対象への興味・学ぶ喜び」の関連を検討したところ，「受験との重なりの負担」「作業の負担」については満足度による違いは見られず「教員の支援」「対象への興味・学ぶ喜び」が満足度の高い生徒ほど高くなっている。生徒の満足度の違いには負担よりもむしろ対象への関心や支援が関っていることがわかる。

3　事例研究からみる生徒の背景の違い

A　満足度の高い生徒はテーマ設定時からテーマがはっきりしており，研究の作業もわりあいスムースである。探究の中で達成感や体験の広がりを得られている。

B　満足度の低い生徒は，テーマがなかなか見出せない，研究以外にしたいことがあるなど，卒業研究への動機が低いことが特徴である。そして課題の難しさ・教員の支援の不足などから方向性を見失ってしまう

C　卒業研究に対し肯定的になっていく生徒は，はじめはテーマが見出せず，研究への動機も低いが，教員の支援と研究対象への関心により追究が支えられる。

事例：教員の支援により支えられた生徒
テーマ『音楽～音が人に与えるものとは～』

研究開始前の時点でのテーマは『才能と教育について』であり，その理由は「本を読んでなんとなく思いついた」というものだった。「(研究は) 難しい」「やりたい人だけやればよい」と答えていたが，その後教員めぐりを経て，音楽に関するテーマへと変更した。指導教員が音楽の先生であり，その指導が丁寧だったことから，研究の作業が楽しくなっていく。(「同じ専門の分野の先生なので役に立つことを指導してくれてとてもよいです」) 中間発表の時点では「自分の身近にある“音楽”を様々な観点から捉え，その効用を明らかにする」というテーマとなる。CDで様々なジャンルの音楽を何度も聴きくらべ，その分析を行う。また，音の青森の山村を訪れ，東京の音環境との比較も行い，研究をまとめた。最終的には推薦入試で音楽関係の大学に合格している。終了時に「自分の興味ある分野に博識になった」「大学でするようなことが高校のときにできたのはよかったと思う」と深い満足を示している。また「先生の指導が本当にタメになった」「卒業研究はぜひ必要だと思う」と述べている。

総合考察

今回の結果からは，生徒が総合学習の中で向き合う課題として“受験との時期の重なり”“研究の作業の負担”の二つがあることがわかった。高校での総合学習の導入が遅れている理由に，教師の負担の増加，大学受験が挙げられていたが（文教総研, 1999）その負担は総合学習を行う側の生徒にも同様に感じられていることがわかる。だが，総合学習が生徒にとって，不要なものかというと，そうではない。終了時の生徒の満足度は高く，満足度の高い生徒は新たな人との出会い，達成感，体験の広がりを得られている。また満足度別の分析からは「受験との両立の負担」「作業の負担」「教員の支援」「対象への興味・関心」の中で「対象に対する興味・関心」が生徒の満足度に最も関わる要因であることが見出されている。対象への関心が充分にある場合に総合学習は，高校生にとって十分な成長体験となるといえるだろう。

生徒の探究の過程を支えるものとして考えられるのは，一つは本人の関心に沿ったテーマを設定する過程への支援である。テーマは学習の核にあたり，関心のあるテーマを探究することで得られる達成感や人との出会い自体がまた探究をささえることになる。テーマの素地となる生徒の事前の体験を豊かにしておくこと，興味を意識化できるような話し合い，テーマの実現可能性の検討が必要であろう。

もう一つは探求過程での適切な教員の支援である。探究自身は生徒が行うものであるが，事例にも現れているように，教員の支援は生徒の追究に対する重要な支えとなっている。生徒の話を聞く，適切な専門家を紹介する，対象に関する別の観点を示すなどの教員の適切な支援は，生徒の対象の世界への関わりを支えるものである。また，追究の過程は直線的ではなく，テーマ自身も追究の中でたえず更新されていく。その不安定な過程の中で，伴走者として傍におり，探求の方向性を見守る人がいること自体が生徒に安心感を与えることになるだろう。そのような支えが高校生の総合学習の追究において大切であると思われる。

今回もう一つの課題として，生徒の分化が挙がった。

総合学習における生徒の分化に関しては，近藤（1994）高階（2000）も同様に指摘している。総合的な学習は，主体性の重視・決まった枠組みのなさなど独自の構造を持っている。そのような総合学習特有の構造から生じる利点や欠点について，より深い考察や研究が必要であると思われる。

謝辞　質問紙調査にご協力頂いた東京大学教育学部附属中等教育学校の先生方と生徒の方々に心から感謝いたします。